

ジェームズ・ジョイスの「対応」

南 谷 覺 正

外国文化第一研究室

A Reading of “Counterparts” by James Joyce

Akimasa MINAMITANI

World Civilizations

Abstract

This essay is an attempt to explicate in detail the ninth story in James Joyce's *Dubliners*, “Counterparts.” The main focus is placed on the analysis of the psychological and pathological intricacies of the hero of the story, Farrington, while the viewpoint of “epiphany” as Joyce calls it is introduced to help to clarify the theme of the story.

「対応」(“Counterparts”)は、*Dubliners*の9番目の、「成熟期」(“maturity”)の作品群の中では2番目の作品である。執筆順では6番目で、「下宿屋」(“The Boarding House”)の直後、1905年の7月中旬に書き上げられたと考えられている。⁽¹⁾

* * * * *

ベルが激しく鳴って、パーカー女史が送声管のところに行くと、激しい、耳を刺し貫くような北アイルランド訛りの声が叫んだ。⁽²⁾

——ファリントンをここへ呼べ!

パーカー女史は彼女の機械^{マシーン}のところに戻り、机に向かって筆写をしている男に告げた。

——アリン専務が二階でお待ちよ。

男は息を押し殺しながら、あの糞ったれ!と呟き、椅子を後ろに押しやって立った。立ってみると男は背が高く、りゅうとした体軀で、赤黒いワイン色をした、肉に締まりがない顔に、ブロンドの眉と口髭。目は前に少し飛び出し、白目が汚く濁っている。彼はカウンターの板を持ち上げ、顧客たちの間をすり抜けながら、重い足取りで事務室の外へ出た。

男は重い足取りで階段を昇り、二番目の踊り場に立った。ドアには Mr Alleyne の名が刻まれた真鍮のプレートが貼られている。男は、階段を昇ってきたのと心中のむかつきのために弾む息を少し整え、それからドアをノックした。きんきんする声が応答した。

——入れ！

男はアリン氏の部屋に入った。同時に、アリン氏——小男で、よく髭を剃ってある顔に金縁の眼鏡をかけている——は、それまで書類の束の上にかがめていた頭をパッと上げた。それは、ピンク色に禿げあがった頭で、紙の上に憩っている大きな卵という印象を与えた。アリン氏は、一刻も無駄にしなかった。

——ファリントンか？これはどういうことなんだ？どうしていつもいつも君に不平を並べ立てなきゃならないんだ。ボドレーとカーワンの契約書の写しは、なぜまだこちらに届いていないんでしょうかな？4時までにと言ったはずだがね。

——しかし専務、シェリー主任が——

——シカシ専務、シェリー主任が——お願いだからな、シェリー主任ではなくて、私の言うことを聞いてもらえないだろうか？君はいつも何かしら口実を見つけては仕事をサボるが、もういい加減にしてくれないか。今日の夕方までにあの契約書の写しを仕上げなかったら、この件はクロスビー氏の耳に入れることになるよ。聞いているのかね？

——はい、専務。

——聞いているのかね？——あゝ、それからまた別のチョットシタことだが——君に話していると何だね、何か壁に向かって話しているような気がするよ——いい加減わかってもらいたいもんだが、君の昼休みは1時間の半分であって、1時間と半分じゃないんだよ。君は一体昼食に何皿食べているんだね？——君、聞いているのかね？

——はい、専務。

アリン氏は、ふたたび頭を書類の上にかがめた。立っている男は、その、クロスビー&アリン事務所を取り仕切っているつるつるの頭蓋を睨みつけ、その脆さを計測していた。怒りの発作が彼の咽喉を少しの間締めつけたが、やがて退いていった。あとには烈しい咽喉の渴きが残った。男は自分の中に渴きが生じたことを認識し、その晩は酒を烈しく呷らずにはとても収まらないと感じた。月も半ばを過ぎており、もし写しを定時までに仕上げられれば、アリン氏は、給料の前払いの許可を出してくれるかもしれない。彼は、書類の上にかがめられた頭を凝視しながらじっと立っていた。突然、アリン氏は、何かを探そうとして書類の束を引っかき回し始めた。それからまるでその瞬間まで、男の存在に気づかなかったというふうに、やおら頭を再び上げて言った。

——何かね、君はそこに1日中つつ立っているつもりなの？頼むから、ファリントン、言われた通りにやってくれたまえ。

——ただ、少し考えて——

——たいへん結構。タダ、少し考エる必要はないんだよ。下に降りて、とっとと仕事をするんだ！

男は重い足取りでドアのほうに歩いた。部屋を出るとき、アリン氏が、夕方までに契約書の写しを仕上げなかったら、この件はクロスビー氏の耳に入れることになるからな、と叫んでいるのが聞こえた。

彼は階下の事務室の自分の机に戻り、写さなければならない書類の枚数を数えた。彼はペンを取り上げ、インク瓶に漬けた。しかし目は、書きかけの文言を呆けたように見つめ続けた——「いかなる場合にも、当バーナード・ボドリーは——」夕刻が迫りつつあった。もう数分すればガス燈が点されるだろう。そうすれば書けるようになる。とりあえず咽喉の渇きを鎮めなければならない。彼は机から立ち上がり、最前と同じようにカウンターの板を持ち上げて、事務室から出た。外に出ようとするとき、主任がもの問いたげな表情で彼に視線を走らせた。

——シェリー主任、大丈夫、と男は、人差し指で外出の目的を表しながら言った。

室長は帽子掛けをちらりと見て、全てのペグに帽子が掛かっていることを確認し、何も言わなかった。男は踊り場に出るとポケットから格子模様の帽子を取り出してかぶり、ぐらつく階段をすばやく降りた。通りに面したドアを出ると、道の内側をひそやかに歩き、角まで行くと、やにわにそこの入口に飛び込んだ。そこはオニールの店の暗い個室で、ここに入ればもう安心だった。バーに面した小さな窓口に腰を下ろし、血が昇り、赤黒いワイン色をした肉塊のような顔から大声を出した。

——おいパット、例の痺れ薬を一杯頼む！

給仕が運んできたポーターを、男は一息に飲み干し、キャラウェイの種を注文した。男は1ペニーをカウンターに置き、給仕が暗がりの中を手探りで探すにまかせ、席に着いたときと同じように、こっそりと席を抜け出た。

暗がりが、濃霧に寄り添われながら、2月の夕暮れに忍び寄り、ユースタス通りの街灯はもう灯されていた。男は家並みを通りすぎ、事務所のドアに帰り着き、時間までに複写を仕上げることができるかどうか思案した。階段のところで、湿っぽい、強い香水の匂いが彼の鼻腔を襲った。彼がオニールの店に行っている間にドラクール嬢が来たに違いない。彼は帽子を再びポケットに突っ込み、考え事をしている顔つきで事務室に入っていった。

——アリン専務が探してたぞ、と主任が厳しい口調で言った。どこへ行ってたんだ？

男はカウンターのところに立っている二人のお客にちらりと視線をやり、今お客がいるからちょっと、というそぶりをしてみせた。お客は二人とも男であったから、主任は笑い声を立てた。

——そうか、そうか。だが1日に5回というのはちょっとな……それはそうと、急いでドラクールさんの書簡の写しをアリン専務に持って行ってくれ。

客の前でのこうしたあしらい、階段を走って昇ったこと、それに急いで飲み干したポーターが男の頭を混乱させた。そして机に向かって坐ると、5時半までに契約書を写し終えることがいかに絶望的に気づいた。暗い湿った夜が近づきつつあった。彼はこの夜を酒場の照明の煌めきとグラスの触れ合う音に包まれながら、友人達と飲んで過ごしたいと切望した。彼はドラクール書簡の写しを取り出し事務室の外に出た。彼は、最後の2通分が欠けたままであることにアリン氏が気づかなければいい

がと思った。

湿った強い香水の匂いが、アリン氏の部屋までずっと続いていた。ドラクール嬢はユダヤ人的な風貌の中年の女性で、アリン氏は彼女に甘い、というか、彼女の金に甘いという風評がある。彼女はこの事務所によく来て、来ると長居した。今彼女は彼の机の横に、香水の香りに包まれて、傘の柄をなでながら帽子の大きな黒い羽を頷かせていた。アリン氏は、椅子を彼女の方に回転させ、右足を左膝の上に気取って載せていた。男は書簡の写しを机の上に置き、うやうやしくお辞儀したが、アリン氏もドラクール嬢も彼のお辞儀には目を向けなかった。アリン氏は男が置いた書簡の写しを指でコツコツと叩き、次ぎにその指を男に向かってピンとはね上げた。もういいから出ていけ、という合図。

男は階下の事務室に戻り、机に向かって坐った。彼はまだ写し終えていない「いかなる場合にも、当バーナード・ボドリーは——」という文章を見つめ、最後の3つの言葉がいずれもBという文字で始まっているのは何とも奇妙だと考えた。主任はパーカー嬢に向かって、手紙のタイプを急がないと郵便に間に合わないぞと急かした。男は数分の間、カチカチというタイプの音を聞いていて、それから複写を終えるべく仕事に取りかかった。しかし彼の頭ははっきりせず、酒場の照明と騒めきのほうへと彷徨っていった。今日は、ホット・パンチの夜だ。彼は筆写に苦闘し続けた。しかし時計が5時を打ったときまだ写さなければならない頁が14枚あった。糞つたれめ！これではとても間に合いそうもない。彼は口に出して呪いの言葉を吐きたかった。拳を何かの上に荒々しく振り下ろしたかった。彼はあまりに怒りにいきり立ったので、Bernard Bodleyと書くべきところをBernard Bernardと書いてしまい、新しい紙に最初から写し直さなければならなかった。

彼は力には自信があり、やろうと思えばこの事務所全体を一人でひっくり返すことができると思った。彼の肉体は何かしたくて疼いた。外に駆け出して乱暴狼藉の限りを尽くしてみたかった。彼の人生のもろもろの冷遇が彼の怒りを掻立てた……出納係に個人的に給与の前払いを頼んでみてはどうだろう？いや、あの出納係は駄目だ、お話にならない、あいつは前払いなど受け付けないだろう……彼はどこへ行けばレナードやオハロランやノージー・フリンに会えるか分かっていた。彼の感情の気圧計の針は、激しい狂乱の酒宴を指し示していた。

彼は想像にどっぷり漬かっていたので、彼の名前が2度呼ばれるまで返事ができなかった。アリン氏とドラクール嬢がカウンターの外に立っていて、全ての事務員が何かが始まろうとしている気配に、首をそちらに向けていた。男は机から立ち上がった。アリン氏は、2通分の複写がないと激しく罵っていた。男はそれについては何も知らない、自分は忠実に写したと答えた。アリン氏の攻撃は続いた。それは辛辣を極めた攻撃で、男は彼の前にいる小男の頭に拳を振り下ろしたくなるのに辛うじて耐えていた。

——他の2通の手紙と言われましても、何もわかりませんが、と彼はすつとぼけた調子で言った。

——何モ、ワカリ、マセン、だと！そうともな、確かにお前は何もわからない人間だよ、とアリン氏は言った。一つお伺いしたいもののだがな、と彼は、隣の婦人の顔色をちらりと見やってから付け加えた。君は私を馬鹿だと思っているのか？どうしようもない馬鹿だとでも思っているのか？

男は、視線を婦人の顔から、小さな卵形の頭に向け、それから再び婦人へと戻した。そして、ほとんど自分でも気づかないうちに、彼の舌が好機を攫んでしまっていた。

——専務、その質問を私に聞くのはいかがなものでしょうかね。

あたりの事務員たちの呼吸が一瞬止まった。誰もが（この機知の科白を発した当人を含めて）啞然とした。ドラクール嬢は、がっしりした体格の愛嬌のある婦人であったが、その顔に大きな笑みが広がり始めた。アリン氏は、顔を野バラのように真っ赤に染め、口元を小人の激情に引き攀らせた。彼は拳を男の顔の前で震わせた。その拳は、最後には何かの電気仕掛けの機械の球のようにブルブルと振動した。

——この恥知らずの悪党め！恥知らずの悪党めが！いいか、お前をさっさと片づけてやるからな！見てるがいい！今の無礼を謝罪しろ、さもなければ即刻クビだ！お払い箱だ！いいか、いやなら私に謝罪するんだ！

彼は事務所の向かいの家の戸口に立って、出納係が1人で出てこないかどうか様子を窺っていた。事務員たちは残らず退社し通りすぎていった。最後に出納係が主任と一緒に出てきた。彼が主任と一緒にの時は何を言っても無駄だった。男は自分が今置かれている立場が非常にまずいものになっていることが分かっていた。彼はアリン氏に、生意気な口をきいたことについて惨めな謝罪をしなければならなかった。しかし謝罪はしても、明日からの事務所は彼にとって針の筵になることだろう。彼はアリン氏が、どのようにしてピークを苛めぬいて事務所から追い出し、その後釜に自分の甥を呼んできて据えたかを思い出した。彼は凶暴な気持ちになり、咽喉が渴き、復讐心に苛まれた。自分自身も他のどの人間も嫌になってきた。アリン氏は彼に1時間の休息も与えまい。彼の人生は地獄になるだろう。今度ばかりは本当のドジを踏んだのだ。どうして口を慎めなかったのか？だが、彼とアリン氏は最初から折り合いが悪かったのだ。彼がアリン氏の北アイルランド訛りの物真似をしてヒギンズとパーカー嬢を笑わせていたところをアリン氏に立ち聞きされて以来……。あれがケチのつき始めだ。ヒギンズにあたってみれば少し金を借りられたかもしれない。いやいや、ヒギンズには自分の自由になる金などない。所帯を2つも持つ身では……

彼は彼の大きな肉体が再び酒場の慰藉を強く求めているのを感じた。霧が彼の身体を冷やし始めていた。オニールのパットはどうだろう。あの男からは、せしめられたとしてもせいぜいが1シリングでとこだ。1シリングじゃものの役に立たない。何とか算段を講じて金を手に入れなければならない。最後の1ペニーは先刻のポーターに使ってしまった。早くしないと、どこからも金を調達できなくなってしまう。彼は時計の鎖をいじっているうちに、突然、フリート街のテリー・ケリーの質屋を思いついた。そうだ、そいつが妙案だ！どうしてもっと早く気がつかなかったのだろうか？

彼は、どいつもこいつも地獄に落ちやがれ、誰が何と言っても、とにかく今夜はとことん飲みまくるんだと呟きながら、テンプル・バーの細い道を通り抜けていった。テリー・ケリーの店員は、1クラウン！と言ったが、質入れ主は、6シリングを主張して譲らなかった。そして結局、彼の言い値通

りの6シリングが許された。彼は、親指と他の指で、硬貨の筒を挟みながら、喜色に満ちて質屋を出てきた。ウエストモーランド通りに出ると、舗道は仕事帰りの若い男女であふれており、ボロを着た小僧っ子たちが駆けずり回っては夕刊の名前を叫んでいた。男は、この光景を誇り高い満足をもって眺め、事務員の女性たちを巧みに見つめながら群衆を通り抜けていった。彼の頭は電車の鐘の音と馬車の疾駆する音に充ち、彼の鼻はすでにパンチからゆらめき昇る湯気の匂いを嗅いでいた。彼は歩き続けながら、今日の出来事をどのように話すか予め考え始めた。

——そこで俺は奴を、こう冷ややかに見つめて——な、分かるだろ——それから彼女を見た。それから再び奴を見つめた。たっぷり間合いを取ってな。そして、その質問を私に聞くのはいかがなものですかね、と言ってやったんだ。

ノージー・フリンは、デイヴィ・バーンのいつもの場所に陣取っていた。そして彼の話しを聞くと、それはこれまで聞いた中でもとびきり気の利いた科白だと言って、シングルのウィスキーをファリントンに振る舞った。ファリントンもそれに対し振る舞い酒を返した。しばらくして、オハロランとパディ・レナードが入ってきて、その話しが繰り返された。オハロランは、モルト・ウィスキーのホットを皆に振る舞った。そして彼がファウンズ通りのキャランズにいた頃、主任に言い返した言葉を披露したが、それはヴェルギリウスの牧歌に出てくる放縦な羊飼いたちの言葉を模倣したものだから、ファリントンのものに及ばないと言った。それを聞いたファリントンは、皆に、今飲んでいるやつを飲み干して、もう1杯やってくれと言った。

彼らがおのおの飲む酒の名を告げているとき、誰が入ってきたかと思えば、ヒギンズではないか！ 勿論、彼は一座に加わらなければならなかった。皆は、ヒギンズにもその話しをせがみ、ヒギンズは快活に応じた。5杯のホット・ウィスキーの眺めに、魂は快活にならざるを得ない。アリン氏が、ファリントンの顔の真ん前で拳をブルブル震わせている様子を演じて見せると、どっと笑い声が湧いた。続いてヒギンズは、ファリントンの様子を真似て見せながら、そしてかの御大は⁽⁹⁾、こんなふうにご吹く風という風情さ、と言った。ファリントンは、彼の重く汚い目で、笑いながら男たちを見つめ、時々下唇で、口髭についたウィスキーの雫をぬぐっていた。

その振る舞い酒が終わると、少し沈黙があった。オハロランは金を持っていたが、他の二人は持ち合わせがないようであった。そこで一同、少し心残りといった面持ちで店を出た。デューク通りの角で、ヒギンズとノージー・フリンは左に折れ、残りの3人は市街地のほうへ戻っていった。霧雨が冷たい道を濡らしていた。バラスト・オフィスのところまで来たとき、ファリントンは、スコッチ・ハウスはどうかと提案した。酒場は男たちで満ち、話し声とグラスの触れ合う音が響いていた。三人は戸口で哀れっぽい声を立てているマッチ売りたちを押しつけて中に入り、カウンターの前陣取って話し始めた。レナードは彼らをウェザーズという若い男に紹介した。ウェザーズは、チヴォリ劇場でアクロバットとドタバタ喜劇を演じている役者だった。ファリントンは、全員に酒を振る舞った。ウェザーズは、アイリッシュ・ウィスキーとアポリナリス水をもらいたいと言った。ファリントンは、何がどんなものだからよく知っていたので、他の男たちにもアポリナリス水を注文するかどうか聞いた。

しかし彼らは、ウィスキーはホットにしてくれとティムに言った。話しは次第に芝居がかったものになっていった。オハロランが全員に酒を振る舞い、続いてファリントンが振る舞った。ウェザーズは、もてなしの篤さがあまりにアイルランド的だと抗弁した。彼は、皆をいつか楽屋に連れて行って、いい女に紹介しようと約束した。オハロランは、自分とレナードは行くが、ファリントンは結婚しているから行かないだろうと言った。ファリントンの重く汚い目は、男たちが自分を冷やかしているのは分かっているという色を浮かべて睨んだ。ウェザーズは、自分の金で皆に少量の酒を振る舞い、後でプールベッグ通りのマリガンの店で会おうと約束した。

スコッチ・ハウスが閉店になると、彼らはマリガンへ移動した。彼らは奥のパーラーへ入った。オハロランが全員に酒を振る舞った。皆少しほろ酔い加減となってきた。ファリントンが振る舞おうとしているところにウェザーズが戻ってきた。ファリントンがほっとしたことには、今回彼はビターを注文した。資金がしだいに底をついてきていたが、まだ皆が飲んでいけるだけはあった。やがて大きな帽子をかぶった二人の若い女が、格子縞の上着を着た若い男と一緒にやって来て、近くの席に腰を下ろした。ウェザーズは、そっちに向かって挨拶し、連中はチヴォリ劇場が退けて出てきたところなのだと説明した。ファリントンの目は、若い女の1人の方に絶えず吸い寄せられた。彼女の容貌には際立ったところがあった。孔雀の羽のような鮮やかな青色のモスリンの大きなスカーフを帽子に巻き、それをあごの下で大きな結び目を作って結び、明るい黄色の、肘まである手袋をはめていた。ファリントンは、彼女がしばしば優美に動かすふくよかな腕を賛嘆するようにつめた。そしてしばらくして、彼女がファリントンのほうを見つめ返すと、彼は、その黒いつぶらな瞳を一層賛嘆した。すこし斜視の気味のある思い詰めたような目の表情がファリントンを魅惑した。彼女はそれからさらに一、二度彼のほうへ視線を送った。三人が帰ろうとして席を立ちドアに向かうとき、彼女の身体が彼の椅子に触れ、彼女は、あらごめんなさいな、とロンドン訛りで言った。彼は、彼女が部屋を出ていくとき、もう一度振り向かないかと期待しながらずっと見つめていたが、その期待は裏切られた。彼は金がないことを呪い、これまでに振る舞った全ての酒を呪った。特にウェザーズに飲ませた全てのウィスキーとアポリナリス水を呪った。この世に憎悪するものがあるとすれば、それはたかり屋だった。彼は怒りのあまり、友人たちの話しの流れを見失ってしまった。

パディ・レナードが彼の名前を呼んだとき、彼は、彼らが力自慢の話しをしていることが分かった。ウェザーズが、腕の力瘤を見せあまりに自慢するので、オハロランとレナードが、民族の名誉を支えるためにファリントンの登場を要請したのだ。それに応じたファリントンは袖をまくり上げ、上腕の筋肉を周囲に示した。両者の腕が吟味され比較され、そして最後に実際の力比べで決着をつけようということになった。テーブルの上が片づけられ、二人の男はその上に肘を置き、手を組み合った。パディ・レナードがゴー！と言ったら、互いの拳をテーブルに押し倒すのだ。ファリントンは極めて真剣で、どうあっても勝つつもりでいた。

勝負が始まった。約30秒後、ウェザーズは相手の手をゆっくりとテーブルに押し付けた。ファリントンの赤黒い顔が、小僧っ子に負かされた怒りと屈辱にさらに赤黒くなった。

——腕に体重を掛けるのは違反だぜ。フェアにやりな、と彼は言った。

——誰がフェアじゃないって？と相手が返した。

——もう一度こい。三番勝負だ。

勝負が再び始まった。ファリントンの額に血管が浮き出、青白いウェザーズの顔が真っ赤になった。二本の腕と手が、ぶるぶると震えた。長い闘争の末に、再びウェザーズは相手の手をゆっくりとテーブルに押し付けた。観客から称賛の呟きが漏れた。テーブルの脇に立っていた給仕が勝利者の方に向かって頷き、場違いな馴れ馴れしさで言った。

——あゝ、それが腕相撲のコツってもんだ！

——お前が一体何を知ってるって言うんだ？とファリントンが、その給仕の方を向きながら激しく言った。お前に何の関係がある？

——シッ、シッ！とオハロランが、ファリントンの顔に凶暴なものを認めて言った。じゃ皆、精算だ。それから最後に1杯やって、それでお開きにしようぜ。

.....
オコンネル橋の角にむっとりした顔の男が、家に帰るため、サンディマウント行きの電車を待っていた。彼はくすぶる怒りと復讐心で一杯であった。彼は屈辱にむしゃくしゃしていた。彼は酔ってさえないなかった。しかもポケットの中には2ペンスしかなかった。彼はすべてを呪った。事務所では自分の身を滅ぼすようなことをしてかし、時計は質草に取られ、その金はすっからかんになり、それなのに酔ってさえない。彼は再び咽喉の渴きを覚え、熱い酒の匂いでむせかえるような酒場に戻りたいと思った。彼は、まだほんの小僧のような男に二度までも負かされ、強い男としての名声を失った。彼の心は激怒で膨らんだ。そして大きな帽子を被って彼に身体を擦りよせ、ごめんなさい、と言った女を思うと、憤怒で窒息しそうになった。

シェルボーン通りで電車から降りた男は、兵舎の壁の影の中を、その大きな身体を運んでいった。彼は家に帰るのを厭悪した。勝手口から入ると、台所には誰もおらず、台所の火もほとんど消えかけていた。彼は二階に向かってどなった。

——エイダ！エイダ！

彼の妻は、小柄な鋭い顔をした女性で、夫が素面の時には夫をいびり、夫が酔っているときにははいびり返されていた。二人の間には五人の子供がいた。小さな男の子が階段を降りてきた。

——誰だ？と男は暗がりを覗きながら言った。

——僕だよ、パパ

——誰だ？チャーリーか？

——違うよ、パパ、トムだよ。

——お母さんはどこにいる？

——教会に行ってるよ、パパ。

——そうだったな……俺の夕食は残ってるのか？

——うん、パパ。僕が……

——明かりをつけろ。暗いままにして一体どういうつもりなんだ。他の子たちはみんな寝てるのか？

男は椅子の1つに重そうに腰を下ろし、子供はランプに灯を点けた。彼は、子供の平板な訛りを半分独り言のように真似し始めた——教会ニ行ッテルヨ、教会ニ行ッテルヨ、か。ランプに灯が点くと、男はテーブルに拳を叩きつけて叫んだ。

——夕食はどうした！

——僕が……今つくるから、パパ、と小さな子供は言った。

男は激しく飛び上がって火を指さした。

——あの火でか！火を消しちまってるじゃないか！畜生めが、何ならもう一度火の消しかたを教えてやろうか！

彼はドアのほうに少し歩いて、ドアの後ろに立て掛けてあった杖をつかんだ。

——火を消したらどうなるか教えてやろうじゃないか！と、彼は腕を自由に使えるように袖をまくり上げながら言った。

男の子は、パパ！と叫び、泣きそうな顔でテーブルの周りを走って逃げた。しかし男は後を追いかけて、子供の服をひつつかんだ。男の子は必死であたりを見回したが逃げ道を見つけだせず、その場にストンと跪いた。

——今度火を消したら！と、男は、杖で子供を強く打ち据えながら言った。食らえ、この犬コロめが！

男の子は杖が腿に食い込む苦痛に悲鳴を上げた。そして宙に両手を組み合わせた。声は恐怖で震えていた。

——パパ！と彼は叫んだ。ぶたないで、パパ！そしたら……そしたら、Hail Mary を唱えるから……ぶたないでくれたら Hail Mary を唱えるから、パパ……Hail Mary を唱えるから……

* * * * *

「対応」と前作の「小さな雲」は、主人公が文書の筆写という地味な仕事についていること、作品の舞台が「職場」——「酒場」——「家庭」、という三つの明確に区切られた場所に設定されていること、最後の場面での、自分の子供に対する主人公の愛情の欠如が暴露されていることなど、偶然とは思えない類似点が多く、ジョイス自身が、15の物語を配置する上で、この二作を、“counterparts”として意識したであろうことは十分に想像できる。

「小さな雲」のチャンドラーと「対応」のファリントンの人物設定は、チャンドラーが、身体が小さく、几帳面、繊細、小心翼翼であるのに対し、ファリントンは、大柄で、不注意、粗野、乱暴で、対照的と言えるが、どちらの主人公も、ダブリンという近代都市に巣食う「麻痺」に絶望的に絡めとられているという点では近親関係にある。

単調で無味乾燥な仕事を強制されているファリントンは、職務に対する不適応を示し、それを上司

アリン氏に咎められ、僅かに反抗するもののそれも打ち砕かれ、屈辱的な目に遭う。その憂さ晴らしにと出かけた酒場でも、質屋に行っても調達した金を使い果たしたにもかかわらず、逆にプライドを踏みにじられ、屈辱感は癒されるどころか逆に募ってしまう。その結果、帰ってから自分の幼い子供に暴力をふるうことによってわずかに鬱憤晴らしをしようとする——「対応」を表層的に読んだとしても、それはそれとして、現代にも通じる「自然主義的」な物語として通用しよう。

この点に関し、よく引用されるジョイスのスタニスラウス宛の1906年11月13日の手紙の一節——“I am no friend of tyranny, as you know, but if many husbands are brutal the atmosphere in which they live (vide Counterparts) is brutal and few wives and homes can satisfy the desire for happiness.”⁽⁴⁾——を見ると、ジョイスが、家庭内暴力の1つの原因として、社会自体の酷薄さを意識していることが分かる。

近代社会に内在する、非人間的な「機械的」な本質が、人間疎外の1つの元凶になっていることは、「対応」でも綿密に描き込まれている。物語冒頭のベルの音、送声管を伝わって聞こえる機械音のような甲高いアリン氏の声、パーカー女史の“machine”こと、タイプライターの音。そして何にも増して、ファリントンの仕事自体が、契約書や書簡を1字1句忠実に写すという機械的なものである。

“Bernard Bodley”と書くべきところを、“Bernard Bernard”と書き誤ってしまうのも、文意を取りながらではなく機械的な書写に陥っているからこそ犯す誤りである。(しかも1字書き損じても、全部を最初から新しい紙に写し直さなければならない。) 写しかけの文章 “In no case shall the said Bernard Bodley be...” 中の3語が同じ文字で始まっているのをファリントンが奇異に思う箇所があるが、それは、言葉を、無機的な偶然の羅列に過ぎないものとして処理しているがゆえである。この物語のタイトルの“Counterparts”は、第一義的には、「副本」、つまり、この法律事務所で原本に忠実に複写されるコピーのことを指している。

アリン氏の描写は、主にファリントンの目を通してなされるが、例えば、その頭は書類の上に憩う卵に喩えられるなど、徹底して戯画的である。アリン氏は、請け負った仕事を正確に着実にこなしていくことを誇りにしている、金縁眼鏡をかけた能吏タイプの人間であり、その意味では、「副本」が身に馴染んだ、機械的な存在に憩っている。

アリン氏は自分のようでない人間を軽蔑し、ファリントンをいたぶることに於いて(例えば、“Understand once for all that you get a half an hour for your lunch and not an hour and a half.”とか、“Mr Alleyne tapped a finger on the correspondence and then flicked it towards him as if to say: That’s all right: you can go.”の箇所などが好例)のみ、言葉や仕草が機械以上の生彩、というか、機械的存在ならではの生彩を帯びてくる。しかし、ファリントンの対応が、いつもの卑屈なものから外れ、予想外の挑戦を返してきた場合には、彼は度を失い、その機械的な本性が、グロテスクに露呈されてくる。例えば、次の一節の、アドレナリンの噴出、口元の引き攣り、電気機械を思わせる拳の振動、そして同じ言葉の循環的な使用にそれがよく見て取れる。

Mr Alleyne flushed to the hue of a wild rose and his mouth twitched with a dwarf's passion. He shook his fist in the man's face till it seemed to vibrate like the knob of some electric machine: —You impertinent ruffian! You impertinent ruffian! I'll make short work of you! Wait till you see! You'll apologize to me for your impertinence or you'll quit the office instanter! You'll quit this, I'm telling you, or you'll apologize to me——

「対応」では、人の言った言葉の模倣（コピー）というモチーフが多用されている。ファリントンが、ヒギンズやパーカー女史相手に、アリン氏の物真似をしてみせて笑わせていること、ファリントンを呼びつけたアリン氏が、二度もファリントンの言葉を小馬鹿に模倣していること、階下に降りてきたアリン氏が再び、ファリントンの“know nothing”を模倣し嘲弄していること、家に帰ってきたファリントンが子供の言った“at the chapel”をからかい気味に真似ていること、ファリントンの言い放った失言“I don't think that that's a fair question to put to me.”が、ファリントンの頭の中で1回、そして酒場で2回実際に繰り返されていること、またヒギンズがアリン氏の所作を真似て一同を爆笑させていることなどがそれである。

copying は、生命の維持、成長にとっては必須の、文化の伝播、深化にとっても重要なプロセスであるが、「対応」に描かれた、文書の書写を含めた copying の営為には、そうした生成発展的な意義を認めることができない。すべてが、退嬰的な、他の人間を苛めたり、嘲笑したりする機能に矮小化されていて、人間精神のいじけた嗜好に奉仕させられているにすぎない。この近代都市における生活の中に、それを助長する何ものかが存在するということが意識されているのである。

アリン氏を率領している原理は、彼の北アイルランド訛りからも推測されるように、プロテスタント的な efficiency, precision であるが、同時に、彼のドラクール嬢へのおもねりを見ても分かるように、金銭への「合理的な」アプローチでもある。また一方、ドラクール嬢のいるところでの、ファリントンに対する、小蠅を追い払うような、故意の無視と侮蔑的なあしらいは、雇用者としての権威に基づいているが、彼はそれを、性的な魅力に転用しようとしている。

ファリントンは体格が大きく、膂力もありそうで、「雄」としての観点から見れば、小男で非力なアリン氏よりも強者であることは明白であるが、近代都市のビジネスの世界では、逆に、アリン氏がファリントンを牛耳る力を掌握してしまっている。“When he stood up he was tall and of great bulk. He had a hanging face, dark wine-coloured, with fair eyebrows and moustache: his eyes bulged forward slightly and the whites of them were dirty.”というファリントンの容貌の描写には、本来の素質が発揮できない状況に置かれた「雄」の体内の血の澱み、気の鬱積を読み取ることができる。また、“hanging face”とか、“the colour of dark wine or dark meat”といった描写には、これから屠られようとしている生贄の牛というイメージも纏綿している。

ドラクール嬢のいるところでのこの二人の男性の振る舞いを見てみよう。

Mr Alleyne began a tirade of abuse, saying that two letters were missing. The man answered that he knew nothing about them, that he had made a faithful copy. The tirade continued: it was so bitter and violent that the man could hardly restrain his fist from descending upon the head of the manikin before him.

—I know nothing about any other two letters, he said stupidly—

—You—know—nothing. Of course you know nothing, said Mr Alleyne. Tell me, he added, glancing first for approval to the lady beside him, do you take me for a fool? Do you think me an utter fool?—

The man glanced from the lady's face to the little egg-shaped head and back again; and, almost before he was aware of it, his tongue had found a felicitous moment:

—I don't think, sir, he said, that that's a fair question to put to me—

アリン氏が、ドラクール嬢の“approval”を求めたというのは、直前に言った、“Of course you know nothing.”という皮肉に続けて、さらに皮肉という攻撃を生贄に浴びせて血祭りにすることをドラクール嬢が喜ぶかどうかの確認ということである。ファリントンは、アリン氏と二人きりの場であれば、違った展開になった可能性があるが、ドラクール嬢のいるところでは、平然としらを切るよう誘導されているようだ。彼がドラクール嬢を強く意識していることは、“Do you think me an utter fool?”という言葉が発せられたとき、ドラクール嬢の方を見ており、例の放言も、ドラクール嬢に向かって発せられたものとして描かれていることに看取できる。従ってこの場面は、ドラクール嬢という「思い姫」を巡る雄同士の対決という構図になっている。ファリントンのアリン氏に対する侮言をドラクール嬢は笑みによって認証し、それによって、アリン氏の激昂は絶頂に達したものと推測される。

しかし、言葉の応酬では対抗できたファリントンも、所詮落ち度は彼にあるのだし、彼を解雇する権力を持つアリン氏に屈する以外にはなく、最後にはアリン氏の前での“abject apology”を強いられることになる。のみならず、今回の失態は、針の筵の生活が今後ずっと彼を待っていることを意味するのである。

こうした、それこそ“fair”とは言えない社会組織の力に常に屈していなければならない鬱屈と屈辱感が、ファリントンの中に、今にも暴発しそうな怒りを蓄積させる。“The man stared fixedly at the polished skull which directed the affairs of Crosbie & Alleyne, gauging its fragility” というところでは、殺意に近接した心理を暗示するものまでが潜んでいる。

* * *

近代都市生活者を呪縛しているもう1つのものは「時間」である。ファリントンが部屋に入ると、“simultaneously”に頭を上げ、一刻も無駄にしない様子(“Mr Alleyne did not lose a moment . . .”) で用件を処理していくアリン氏の生活態度は、多かれ少なかれ、都市の勤労者に等しく課せられるものだ。物語の中で、ガス燈に灯が点され、濃霧とともに夜の闇が忍び寄り、冷気があたりを覆い、冷たい雨がそば降るようになっていく、自然な時間の推移の中に、もう一つ、近代社会の人為的な制度としての「時間」——4時までには済まさればならぬ仕事、5時半の終業時刻、半時間の昼食休憩——が組み込まれている。パーカー女史は郵便の最後の収集の時刻に間に合わせるべくカチカチとタイブラ

イターを叩かねばならない。

その意味で allusion を提供しているのは、物語の中に出てくる“Ballast Office”である。これはダブリンの港湾業務を取り仕切っていた建物で、イギリスの支配を浸透させる agent の1つという意義もあるが、同時に、「時間」の支配という点でも皮肉なメタファーになり得ている。というのは、当時この建物の上に大きな球が据えられていて、それがグリニッジ時間（グリニッジ時間はついに地球全体を支配するようになり、現代の我々もその支配下に入っている）の午後1時になると下に落とされ、それによってダブリン市民に時刻を知らせることになっていた。ところが時差があるので、ダブリン時間では、それは12時35分という中途半端な時刻であった。ロンドンの午後1時が標準であるから、ダブリンの時間はその基準に服さねばならなかったのである。人為的な時間の喜劇的顕現とも言えよう。

ファリントンは、この人為的に決められた時間に生理的なアレルギーを発症させ、必ず遅れてしまうという性癖を持っているようだ。4時までという締め切りを守れず、アリン氏から渋々ながらの5時半という最後通牒を与えられたファリントンは、それでもなお仕事に取り掛からず、ガス燈が点されたら仕事をしよう、まず喉の渴きを鎮めなければ仕事ができないというふうに、あらゆる事を考え、やがて機会を見つけると、やにわに行動に移り、トイレに行くふりを見せて職場を抜け出し、近くの酒場で酒を呷る。ところが仕事に戻ってきて馬力を出すのかと思いきや、締め切りまでにとうてい終えることはできないと諦めているのである。（それなら酒場に行く前に、今集中して仕事をしなければ間に合うはずはないと思いきや、そうは思わない、思えないのである。）そして、アリン氏の部屋に2度目に呼ばれ、帰ってきた後も、タイプの機械音を数分聞き、それからおもむろに筆写に取り掛かるが、頭の中は酒場の心和む光景の想像に流れていき、なかなか集中することができない。時計が5時を打ち、残り30分になった時点で、あと14枚という絶望的な状況である。これはファリントンの性格的な悲劇であろうか？ 事実はさにあらず。どうやら、ファリントンには、締め切りを守れぬような余儀のない状況に、無意識に自分が追い込まれていくように巧妙に計らう確信犯的要素が見取れるのである。

ドラクール書簡の写しの件では、最後の2通分が欠けていることをアリン氏が気づかなければよいがと思っている。ということは、前に書簡の写しをいついつまでに仕上げるようにと命じられ、それに取り掛かったものの、同じような形で仕事を遷延し、締め切りに間に合わず、最後にはしらばくれて、2通分筆写しないまま、筆写しおえたということにして、原本を返してしまったという経緯が推測される。

「トイレ休憩」についても、5度は多すぎると主任に皮肉られていることを見れば、読者には告げられていないが、実は4時以前にも酒場に逃亡していたのではないか。ポケットに押し込んでいる帽子は、彼が「トイレ休憩」の常習犯であることを示唆している。さらにアリン氏の言葉を信じれば、昼食時には1時間半も会社を離れており、それも今日だけのことではないらしい。

記述のすき間に覗くこうしたファリントンの姿を検分していくと、読者は、ファリントンは、近代

都市生活者にかけられた呪いによって「自然に」麻痺しているのではなく、近代都市生活者にかけられた呪いに寄生して、自己欺瞞の怠慢へとこっそり逃亡しているのではないかという猜疑に襲われてくる。そう思って読み返してみると、ファリントンの足取りが重いことがたびたび強調されているが、それも、彼が抱えているいろいろな辛苦についての思わせぶりなのではなかろうか？彼が酒場の“snug”に滑り込むまでの動作の周到さ迅速さ、また、質屋で軍資金をせしめた後の彼の足取りの快活さを見てみると、最初に見せていた足取りの重さは、実は、仕事をしなくてはならない時間をなるべく自然に減らしていくためのほぼ無意識の奸智だったのではないかと思われてくるのである。

そういう意味で、ファリントンは、「小さい雲」のチャンドラー同様、なかなか隅に置けないところを持っており、そういう深層的なレベルでも、よき“counterpart”たり得ている。例えば、次の passage を見てみよう。

Just as they were they were naming their poisons who should come in but Higgins! Of course he had to join in with the others. The men asked him to give his version of it, and he did so with great vivacity, for the sight of five small hot whiskeys was very exhilarating. Everyone roared laughing when he showed the way in which Mr Alleyne shook his fist in Farrington's face. Then he imitated Farrington, saying, And here was my nabs, as cool as you please, while Farrington looked at the company out of his heavy dirty eyes, smiling and at times drawing forth stray drops of liquor from his moustache with the aid of his lower lip.

When that round was over there was a pause. O'Halloran had money but neither of the other two seemed to have any; so the whole party left the shop rather regretfully. At the corner of Duke Street Higgins and Nosey Flynn bevelled off to the left while the other three turned back towards the city. Rain was drizzling down on the cold streets and, when they reached the Ballast Office, Farrington suggested the Scotch House.

ファリントンは、職場での失敗を、逆に自分の手柄話に変換すべく、事前に頭の中で話し方の予行演習を行ってから、ノージー・フリンに1度、そして、オハロランとパディ・レナードが合流してからもう1度、その話を披露し成功を収めている。そこへ誰だろう、会社の同僚のヒギンズが入ってきた、という場面である。この時のファリントンの心理を想像すると、決して心穏やかではなかったはずで、彼が何よりも恐れたのは、話が彼の意識から締め出しているところの“abject apology”に及ぶことであっただろう。

話を求められたヒギンズの目に、5杯の“hot whiskeys”が入ってくる。彼が来る前は、4人のグループであり、ファリントンが酒を振る舞おうとしているところだったのだから、5杯の“hot whiskeys”が目の前に並べられたということは、ファリントンがヒギンズの分を追加注文したということを示している。⁽⁶⁾ 従って、ヒギンズには、ファリントンを英雄扱いすることが、今晚のヒギンズの「酒福」を約束するものであることが暗黙裏に伝えられたのである。アリン氏の激昂ぶりの mimicry は大成功を収めた。そこで彼は、さらに称賛を続ける——“Then he imitated Farrington, saying, *And here was my nabs, as cool as you please*” この時、ファリントンは、一座から少し距離を置いてい

る。彼はヒギンズが期待したかもしれないもう一度の“round”を行わない。それが、ヒギンズが話し終わった後の、沈黙の間の意味である。オハロランしか金を持っていないというようなことで、皆、未練を残しながら店を出て、ヒギンズとノージー・フリンは家に帰り、残り三人が北に向かう。そしてやや歩いたところでファリントンが別の店に二人を誘っている。ということは、ヒギンズを帰してしまうことが、ファリントンの策謀だったことになりはしないか。

narrative は、ファリントンの意識を代弁しているところがあって、よく注意して読まなければ、読者自身も誑かされる怖れがある。例えば、彼の怒りを最もよく要約し、また読者の同情を最も買いそうな、“All the indignities of his life enraged him” というような言葉にしても、どの程度信用の置けるものなのか、よく吟味する必要がある。例えば、最初にアリン氏の部屋に呼ばれた時は、ファリントンは殺意までも含んだ怒りを燃やしている。しかし、“A spasm of rage gripped his throat for a few moments and then passed, leaving after it a sharp sensation of thirst. The man recognized the sensation and felt that he must have a good night’s drinking.” とあるように、怒りの発作は一過性で、それはすぐ喉の渇きに席を譲り、続いて直ちにその夜の pub のイメージが脳裡を占め、さらに続いて、そのための金の算段をどうつけるかというふうに、軽やかにスライドしていつている。従って、アリン氏の話が終わった後で、アリン氏のピンク色の頭蓋を見つめている時には、ファリントンは、それを打ち砕くところを想像しているのではなく、その頭の中に、給料の前払いをしてくれるかどうかの可能性を探知しようとしているのである。突っ立っていることをアリン氏に再び叱責されたときには、先程の怒りはすっかり影を潜め、ほとんど懇請的な調子の言葉が口から漏れてくるのはその証である。

ドラクール書簡の写しを届け、侮蔑的にあしらわれ、一人腸を煮えくりかえらせている時も、“He felt strong enough to clear out the whole office single-handed. His body ached to do something, to rush out and revel in violence. All the indignities of his life enraged him Could he ask the cashier privately for an advance?” と、同じパターンの思考のスライドが生じている。しかも読者は、“revel in violence” に、度肝を抜くような痛飲ぶりを予想するのだが、現実の酒場においては、きわめて大人しい飲みっぷりでしかなく、結局、彼の「怒り」も、「痛飲」も、自己の不遇を弁護するための想像上の独り芝居にすぎず、現実の酒場においては、いつも、髭についた酒の滴を啜るような、しけた飲みっぷりしかしないのではないかという印象が拭えない。

アリン氏は、畢竟金銭の奴隷であり、また権力や女性に対しての小人的な執着も見せ、憫笑されて然るべき人物に相違ない。しかし、その意味では、ファリントンも“counterpart”である。質屋で、店側が1 crownと言ったのに、ファリントンは6 シリングを主張して譲らず、1 シリングの増額に執着し凱歌を上げる。(これにファリントンは溜飲を下げるが、結局それは質屋の利益を生むだけのことで、読者の失笑を誘う。)硬貨を重ねた筒を指に挟んでいるときの彼の意気軒高ぶり、また、金が残りに少なくなってきたときに、ウェザーズがアポリナリス水とウィスキーではなくビターを注文してくれてほっとしているところ、さらに、電車賃ほどは最後に残しておくところなど、金銭には実に細かな

計算を働かせている。

女性についての執着ということでは、ドラクール嬢、チヴォリ劇場の女優のに対する彼の態度に明らかだし、また、ウェストモーランド通りを歩いている時の“... and staring masterfully at the office-girls” というようなところにもそれはさりげなく描かれている。

権力を利用しての bullying では、アリン氏がファリントンをいたぶるのと同じ遣り口を自分の子供に対して行使している。所謂、劣等感の捌け口を弱者にリレー式に求めていくわけで、アリン氏→ファリントン→トムのヒエラルキーに沿って、bullying が降下している。(アリン氏は、ファリントンが時間までに仕事を片づけられなければ、この件をクロスビー氏の耳に入れることになるぞと脅していることから判断して、あるいは、アリン氏も、クロスビー氏には頭が上がらないのかもしれない。また、ファリントンたちが酒場に向かうときに登場する、新聞の売り子たち、酒場の戸口にたむろしているマッチ売りたちは、ファリントンたちよりもさらに下の階級であって、ファリントンたちは彼等を冷視し無視することで、自分たちの優越を無意識に確認している。)

この日ファリントンは、アリン氏との言い争いと、ウェザーズとの腕相撲の両方で完膚無きまでに打ち負かされているが、この2つの出来事は、“counterparts” 的な構造を持っている。そのどちらの争いも、もの想いに耽っているファリントンに不意に持ちかけられ、負けっぶりの悪いファリントンが、“fair” という(イギリス人的)価値観に訴え、手がブルブル震え、さらに手ひどい恥を搔かされ、「お前が何を知っている」という意味の啖呵が飛び、そして勝者の方に女性が奪われていっている。

以上見てきたように、「対応」のファリントンには、重層的な形で、ダブリンの「麻痺」が取り憑いている。彼が仕事をさぼって行った先のオニールの酒場で、“Here, Pat, give us a g.p., like a good fellow.” と、“glass of porter” と “general practitioner” を掛けた陳腐な pun を使っているが、この“g.p.” には、“general paralysis” も掛けられていることは十分考えられることである。

“general paralysis” という視点から見て特に注目に値するのは、先述の copying における、ファリントンの宿病的誤謬である。“Bernard Bodley” を “Bernard Bernard” と写し間違えるのはご愛嬌としても、現実には、ドラクール嬢→アリン氏→ドラクール嬢と移した視線を、自分の頭の中では、アリン氏→ドラクール嬢→アリン氏と変換し、また現実には、“I don't think, sir, that that's a fair question to put to me.” であったのを、酒場での話では、“sir” を抜かし、チヴォリ劇場の女優が、“brushed against his chair” した際、“O, pardon!” と言ったのが、回想の中では、“brushed against him” の際、“Pardon!” と言ったことにすり替えられ、またトムの言った、“At the chapel” は “At the chapel. At the chapel, if you please.” と変形されている。このように、現実には、ファリントンの知覚を通過する際に、コピーの error を生じ、常に自分に都合のいいように改変されている。そのことこそ、ファリントンの最も深いレベルでの麻痺症状と言えるのではなからうか。

オニールの酒場への逃避も、narrative (ファリントンの意識をなぞったもの) を読んでみると、ほんの4~5分のことに思える。しかし彼が店を出てきた時には、通りのガス燈が全て点っており、また会社に戻ったときの主任のあきれたような反応を見ても、現実には時間は相当経過しているのでは

ないかと思われる。つまり実際にはかなりゆったりした時間を酒場で過ごしているにもかかわらず、それは本人の意識には、ほんのわずかの時間として濾過されているような印象を受けるのである。

* * *

この物語の一番深い層においては、宗教的なものが意識されているであろう。ファリントンの勤める法律事務所は、chief clerk が取り仕切り、書写が黙々と行われ、さながら中世の僧院を思わせる。かつての聖典の筆写は、現代では、法律文書の筆写に変容している。ファリントンがこっそり出掛けるオニールの酒場の、“the little window that looked into the bar” を持つ “snug” は、中世の教会の “confession box” を思わせ、また酒場の給仕は “curate” と呼ばれている。あるいは、ファリントンが発した “g.p.” には、“Gloria Patri”⁽⁶⁾ の暗喩も含まれているかもしれない。会社に戻ると、姿は見えないが、その存在を示す匂いが漂っている。この物語で、大きな働きをしている二人の女性の描写を見てみよう。

(A) She was sitting beside hid desk now in an aroma of perfumes, smoothing the handle of her umbrella and nodding the great black feather in her hat.

... and Miss Delacour, who was a stout amiable person, began to smile broadly.

(B) There was something striking in her appearance. An immense scarf of peacock-blue muslin was wound round her hat and knotted in a great bow under her chin; and she wore bright yellow gloves, reaching to the elbow. Farrington gazed admiringly at the plump arm which she moved very often and with much grace; and when, after a little time, she answered his gaze he admired still more her large dark brown eyes. The oblique staring expression in them fascinated him. She glanced at him once or twice and, when the party was leaving the room, she brushed against his chair and said *O, pardon!* in a London accent.

二人とも、“*O, pardon!*” を唯一の例外として、しゃべることはなく、前者は微笑みによって、後者は、1度か2度（「1度か2度」ということ自体、ファリントンらしい知覚）の眼差しによってファリントンに大きな影響力を行使しており、現実の生臭い人間とはどこか趣を異にしている。Miss Delacour は “of the heart” という意味であり、彼女の存在下で、ファリントンの舌は、まるで聖霊にでも命ぜられたかのように、“felicitous moment” を見出している。後者は、劇団の女優で、派手で肉感的であり、おそらく身持ちの悪い女性という初期印象を読者に与えるであろうが、その “The oblique staring expression in them fascinated him.” というあたり、どこか不思議に “Madonna” を連想させるものがある。

2月の雨模様の寒い夜で、ファリントンの言葉の中に「月も半ばを過ぎ」とあるから、2月中旬が時間的な設定である。ジョイスの表に出さない構想の中で、この日が、Ash Wednesday として想定されている可能性はかなり高いと思われる。（1904年においては、2月18日(木)が Ash Wednesday に当たっていたことが分かっている。）というのは、そうでなければ、かなり夜更けてからファリントンが帰宅した時に、妻のエイダが “chapel”⁽⁷⁾ に行っているのも、平日であることを思えば、何か特別の儀

式でもない限り説明がつかない。そしてこの時期、その可能性のある儀式と言えば、Ash Wednesday を描いてないのである。エイダが突発的に教会に出掛けたのでないことは、Tom: “She’s out at the chapel.” Farrington: “That’s right.” というやりとりから推定できる。ファリントンはそのことを事前に告げられていて、それをすっかり忘れていたのである。

復活祭前に、Lent (四旬節) という、キリストが荒野で行った修業を記念し、信者もキリストにまねび、肉食を断つなどの禁欲生活を送る期間があるが、Ash Wednesday はその Lent の最初の日である。この日、教会では、人間が灰から生まれ灰に戻る存在であるという聖書の記述に基づき、信者の額に、灰で十字の印を描く儀式を執り行う。(“Remember, man, that thou art ashes and to ashes thou shalt return.” という言葉とともに灰で十字が描かれる。) ファリントンは、暖炉で火が消えてしまったことを怒るが、そこに残されたのが灰であることも、その日が聖灰水曜日であることと暗合していよう。

屠られる生贄としてのファリントンを、一風変わったキリストとして想定する (“He felt strong enough to clear out the whole office single-handed.” という箇所でも、キリストのエルサレムの宮での行為との overtones を感じさせる) ならば、この日のファリントンの経巡る「試練」は、キリストの荒野での試練の安っぽい “counterparts” である。William Bysshe Stein の、ファリントンの “seven deadly sins” を全て犯しているという指摘⁽⁸⁾ は、貴重な洞察になっているが、ただ単に、ファリントンを墮ちた人間とだけ断罪するのではなく、「一風変わったキリスト」ファリントンの、それらの試練に、我々現代人と等しく、裸でさらされているという視野を持つのが適切であろう。Donald T. Torchiana の指摘にあるように、ダブリンの通りは “limbo” であり、pub は “purgatory” (“curling fumes of punch” などの描写にもそれは窺える) の側面を持っている。⁽⁹⁾ Pride, Envy, Gluttony, Lust, Anger, Greed, Sloth——これらの罪の誘惑にファリントンは確かに屈しており、それが彼の目の汚さに覗いている。さらに彼は、これまで見てきたように、自己欺瞞によりその罪を複雑化し、骨がらみにしてしまっている。しかし読者は彼の言動、思惑に笑いを漏らすのはなぜであろうか？

ここでもう1つ、この物語に伏流していると思しき allusion を指摘しておきたい。ウェザーズが注文する、Appolinaris は、19世紀の半ばに、Georg Kreuzberg というワイン商人がドイツのボンの近く購入したぶどう畑から湧出し、以来ドイツの有名な銘柄となっている炭酸水である。この町は、Apollinarisburg と呼ばれるようになったのだが、それは、この土地の守護聖人 St Appolinaris にちなむ。そして、この St Appolinaris には、Eusebius の伝えるところでは、以下のような伝説がある。

Claudius Apollinaris, Bishop of Hierapolis in Phrygia, was one of the most illustrious prelates of the second age of the Church, which began with the edict of Constantine in 313, making Christianity the religion of the Roman Empire.

He addressed an “Apology,” that is, a defense, of the Christian religion to the emperor Marcus Aurelius, who, shortly before, had obtained a signal victory over the Quadi, a people inhabiting the country now called Moravia. One of his legions, the twelfth, was composed chiefly of Christians. When the army was perishing for want of

water, the soldiers of this legion fell upon their knees and invoked the assistance of God. The result was sudden, for a copious rain fell, and, aided by the storm, they conquered the Germans. The emperor gave this legion the name "Thundering Legion" and mitigated his persecution.

It was to protect his flock against persecution that St. Apollinaris, who was bishop of Hierapolis in Phrygia, addressed his apology to the Emperor to implore his protection and to remind him of the favor he had received from God through the prayers of the Christians. The date of the death of St. Apollinaris is not known, but it probably occurred before that of Marcus Aurelius, about the year 175.

この伝説は、ファリントンのしばしば感じる“thirst”とよく呼応している。皮肉なのは、Appolinarisをしこたま飲んだウェザーズが勝利を収め、“thirst”を癒しに来たファリントンは、3軒のpubの後でもまだ癒されない“thirst”に苦しんでいることである。それはさておき、これまで確認してきた宗教的脈絡の中では、ファリントンの“thirst”は、もっと大きな精神的な渴望を表象していると解釈してさしつかえない。

それは一面で、やはり、植民地ダブリンの宿命と深く繋がっているのであろう。北アイルランド訛りでプロテスタント的近代性を持つアリン氏に対する敗北、ウェザーズというイギリス人に対する敗北、ロンドン訛りのチヴォリ劇場の女優への思慕の挫折、そして帰宅時を通る“barracks”(当然その中には、全てのアイルランド人の肉体的な力を屈服させるイギリスの暴力装置が陣取っている)——ファリントンの渴望が癒されない淵源の1つは間違いなくここにあり、ファリントンはその犠牲者となっているのである。

物語の最後の場面は、往時のダブリンでも、また現代の世界のどこの町でも、現実にあるであろう描写になっており、ここでファリントンは、自分の子供という、彼にとっては最も弱者の位置にある者に対して、暴力による憂さ晴らしをしている。いろいろな“counterparts”が目につく。前述したように、アリン氏とファリントンの関係が、ファリントんとトムの関係に対応しているし、また、ファリントンにとってのpubは、アイダにとってのchapelに対応している。

トムは、父親同様、逃げ道を必死になって探す、ついに逃げ道が求められなくなると、跪き、杖で強打されると、両手を祈りの形に組みあわせる。そして、“O, pa! Don't beat me, pa! And I'll I'll say a Hail Mary for you, pa, if you don't beat me I'll say a Hail Mary”と言い、これが物語を締めくくる言葉になっている。父親に対するトム哀願の言葉が痛々しく、ファリントンに対する読者の目は、ここで最も厳しくなるはずである。

恐怖に金縛りとなったトムの言葉も、激昂したアリン氏同様、同じ言葉を機械的に繰り返すだけの「麻痺」症状を呈している。明日からも、ファリントンの境遇が変わらぬ限り、同じことが繰り返され、最後に子供の、逃げ場のない、哀れな、渦のように循環するだけの言葉にたどり着くのかもしれない。

“Don't beat me, pa! And I'll I'll say a Hail Mary for you”と間にpauseが置かれているのは、そこで、考えていることを意味している。自分ができる何かを父親に与えることによって、

打擲を免除してもらおうとしているのである。その結果やっと思出したのが、“Hail Mary”を唱えることであった！

ファリントンば、聖灰水曜日に、様々な試練にさらされ、そしてそのどれ1つにも抗することに失敗した。その結果、アリン氏に散々に踏みにじられ、最後には、“abject apology”を余儀なくされている。どのように“abject”であったかは語られてはいないものの、おそらく様々な“counterparts”から判断して、最後の場面のトムのような懇願を強いられたのではないかと憶測される。どぎまぎして、見るも惨めな“apology”だったのではなかろうか。

しかしその“apology”には、微かながらも、現代の都市に生きる我々読者にも、訴えかける relevance を持っているように思われる。ファリントンの犯すコピーの誤りは、確かに彼の「麻痺」の最も重い症状であるが、それは別の角度から見れば、機械性に息絶え絶えになっているこの世の中で、どこか「人間性」に対する“apology”を感じさせてくれるものになっているのではないか？「小さな雲」のチャンドラーが、自己演技の宿痾の果てに、純粋な羞恥の影のようなものを浮かべたように、ファリントンは、7つの大罪の虜われの果てに、どこか受苦の人間の影を湛えていはいはしまいか？そしてさらに言えば、ファリントンの頭の中で、“O, pardon!”から変容した“Pardon!”という言葉、最後のトムの“Hail Mary”、そしてドラクール嬢のほがらかな認証の笑顔は、今日のファリントンに与えられたささやかな grace の mimicry の趣を湛えていはいはしまいか？最後の場面で果たしてファリントンが打擲を続けられたかどうか、ファリントンを最も不快に思う読者ですら、いささか断定するに躊躇されるのではあるまいか、と思われてくるのである。

— 注 —

- (1) Don Gifford, *Joyce Annotated ; Notes for Dubliners and A Portrait of the Artist as a Young Man* ; Second Edition (University of California Press, 1982), p.72参照。
- (2) テキストには、*Dubliners*, Viking Press, 1961を用いた。
- (3) “his nabs”は、“his nibs”と同義で、それについては、次の説明が参考になった。従って、ここでは、ヒギンズが、ファリントンの動作を物まねしながら、こんなふうに、という意味で言っている言葉と取るのが正しいと思われる。From K Mackay: “I would appreciate your knowledge of the origin of the expression his nibs, which was always applied to my beloved, albeit autocratic, father.”

This is a mock title used to refer to a self-important man, especially one in authority. It is modelled after the pattern of references to the British aristocracy, such as his lordship. Most sources say something like “origin obscure”. It is first recorded in print about 1820, but is presumably older. There is some evidence that nibs is a variant form of nabs, and that both may have their origin in the ancient word neb, meaning a beak or nose, or more generally, the protruding bit of anything (our word for the business end of a pen comes from the same root). Also, nib itself was once used as a slang term for a gentleman, as was another old slang word still to be heard, nob, and these could very probably be connected. Several early examples of the latter are spelled nab and his nabs is a variant recorded form of his nibs. It seems the vowel was highly fluid, not

surprising considering the different dialects and periods it has come through. Perhaps the association with supposed social superiors may have something to do with people so elevated in self-importance that they “have their noses in the air”? (<http://www.quinion.com/words/qa/qa-nib1.htm>)

(4) Richard Ellmann (ed.) *Letters of James Joyce, Vol. II*, The Viking Press, 1966, p.192.

(5) 酒場での“round”を、synopsisに沿って一覧表にすると次のようになっている。(☆は“round”を、括弧内の数字は、振る舞った酒の数を表す。)

1) Davy Byrne (Duke Street)

Nosey Flynn に話す。Nosey Flynn ☆(2) 褒められたことで Farrington ☆(2) O'Halloran と Paddy Leonard が来る。話しが繰り返され、O'Halloran ☆(4) 褒められたことで Farrington ☆(Higgins が加わる)(5) 店を出て、Nosey Flynn と Higgins は帰る

2) Scotch House (Burgh Quay)

Leonard が Weathers を紹介する Farrington ☆(4) O'Halloran ☆(4) Farrington ☆(4) Weathers が “some nice girls” に紹介するという Weathers ☆(4) 閉店になり他の店に移る

3) Mulligan's (Poolbeg Street)

O'Halloran ☆(3) Farrington ☆(Weathers が戻ってくる) (4) 二人の女性と一人の男性の party が来る Weathers と Farrington の腕相撲 O'Halloran ☆(4)

(6) Gloria Patri: “Glory to the Father, and to the Son, and to the Holy Spirit; as it was in the beginning, is now, and will be for ever. Amen.”

(7) アイルランドではカトリック教会のことを chapel と呼び、church は、イギリス国教会系の教会に対して使われる。ファリントンの、“At the chapel. At the chapel...” という mimicry には、妻の「信心」に対するあてつけもあるが、言葉自体の根にある不自然さも標的になっているであろう。

(8) William Bysshe Stein, “‘Counterparts’: a swine song,” *James Joyce Quarterly*, Vol. 1, No. 2 (Winter 1964), pp. 30-32.

(9) Donald T. Torchiana, *Backgrounds for Joyce's Dubliners*, Allen & Unwin, 1986, p.144.